

7th Annual Meeting of the Society for Bioacoustics（第7回生物音響学会年次研究発表会）開催報告

国立研究開発法人 森林研究・整備機構

森林総合研究所 森林昆虫研究領域 主任研究員

研究会担当者（会長） 高梨 琢磨

7th Annual Meeting of the Society for Bioacoustics（第7回生物音響学会年次研究発表会）が、2020年12月4日（金）にオンラインで行われた。一般社団法人生物音響学会の第7回生物音響学会年次研究発表会実行委員会（赤松友成委員長）の主催により、生物に関連した音関係の基礎的・応用的研究について、動物の聴覚、音や振動の影響、行動、神経機構、モデルや方法論などを対象とした英語による発表が行われた。とくに海洋生物関連の発表が多く、本大会の特色となった。日本そして中国、台湾、香港、マカオ、イギリスの6つの国・地域よりから、生物音響学会員と非会員をあわせて、約50名が参加した。

冒頭の招待講演では、中国科学院深海科学工学研究所の Li Songhai 博士によるシナウスイロイルカの長期音響モニタリングの成果発表があった。Li 博士は中国の海生哺乳類研究における若手のリーダーである。一般公演では、台湾の Academia Sinica から Tzu-Hao Lin 博士による水中サウンドスケープの講演があった。教師なし機械学習を用いた動物音声の自動分類手法は、生物音響分野において大きな課題となっているビッグデータ解析を強力に進めるツールとなると考えられた。University of Saint Joseph の Rafael Ayala Lara 氏からはゼブラフィッシュを用いた騒音の聴覚影響の発表があった。世界的に海洋開発が盛んになり魚類への騒音影響基準の策定が求められている現在においてタイムリーな発表であった。続く一般公演の講演者は所属が日本の大学であるものの国籍は多様で、少人数ながら国際的な研究集会となった。昆虫が対象材料となる一般公演は2題あり、農研機構の中野亮博士は「Dive, fly low or fly fast: defense strategy of moths for bat avoidance」を、沖縄高専の金城篤史博士は「An examination of user interface of smartphone application for field research using cicada's calls」を発表した。最後は、昆虫の生物音響学の第一人者 James Windmill 博士（イギリス University of Strathclyde によるガとコウモリの生物ソナーの送受信をめぐる感覚システム「Moth Ears to Bat Echolocation: inspiring sensors to sonar systems」についての招待講演で締めくくられた。Windmill 博士と中野博士の講演から、超音波を用いたガ類害虫の行動制御のメカニズム、そしてそれを応用した害虫防除の可能性が示された。

末筆ながら、本研究会の参加者各位、助成をいただいた（公財）報農会に心から感謝申し上げます。